# 筑波大学留学生センター初級日本語補講コース授業報告

## ―「J100」から「J400」の取り組みと授業改善―

堀　恵子　　石上　綾子　　今井　新悟　　小野寺　志津
木戸　光子　　小浦方　理恵　　近藤　幸子　　酒井　たか子
高原　真理　　段　麗君　　許　明子　　李　在鎬

**要　　旨**

筑波大学留学生センター初級補講コースには、J100からJ400までの４つのコースがある。全体の目標は日常的で具体的な話題についてコミュニケーションができることである。授業は主教材の初級教科書『Situational Functional Japanese』に沿いつつ、各コース独自の取り組みも行っている。筑波大学が2013年度から２学期制に移行するにあたり、初級４コースの授業報告を行うとともに、2011年３学期と2012年１学期を比較することで、学期間の改善を報告する。
【キーワード】初級　補講コース　コミュニケーション　授業改善

# A Report on the Introductory Japanese Courses at the International Student Center of the University of Tsukuba : the endeavors and improvements of J100 through J400

HORI Keiko, ISHIGAMI Ayako, IMAI Shingo, ONODERA Shizu, KIDO Mitsuko, KOURAKATA Rie, KONDO Yukiko, SAKAI Takako, TAKAHARA Mari, DAN Reikun, Heo Myonja, LEE Jae-Ho

【Abstract】The International Student Center of the University of Tsukuba provides four Introductory Japanese courses (J100-J400). The aim of these courses is to provide students with basic communication skills required for everyday life. The texts used in the classes are “Situational Functional Japanese”, as well as original materials. Since the university will introduce a semester system in 2013, this article reports on class activities and improvements, comparing especially changes between the third term of 2011 and the first term of 2012.
【Keywords】introductory level, the Introductory Japanese Course, communication, improvement of the class

## １．背景と本稿の目的

筑波大学留学生センターの日本語補講コースの初級レベルは、2007年からJ100からJ400の４コースで行われてきた（加納2008）。大学が３学期制であるため、年に３回開講されている。テキストは初級日本語教科書『Situational Functional Japanese（以下、SFJ）』のDrill Bookを簡略化した『初級日本語』[1]を用い、１学期10週で６課進み、最速で４学期で初級を終えることができるコースである。2013年度からは、大学が２学期制に移行するのに伴って、日本語補講コースも含め留学生センター開講のすべてのコースを見直すことになる。

2012年度は、３学期制の最後の年度にあたり、これまでの初級日本語補講コースを記録し、２学期制に生かしていくことが求められる。そこで本稿では、初級４コースを通して、コース目標、カリキュラム、授業活動などを示し、初級全体を俯瞰できるように報告する。さらに学期間でどのような点を見直して改訂しているかについて、2011年３学期（以下、2011-3）と2012年１学期（以下、2012-1）を取り上げ、両者を比較することで明らかにする。

## ２．初級日本語補講コースの概要

### 2.1　受講対象者とコースの概要

補講コースは、研究生（教員研修留学生を含む）、短期留学生、正規の学生（学類生、大学院生、G30[2]）、日本語研修生（日韓共同理工系学部留学生を含む）、日本語・日本文化研修留学生、その他留学生センター長が適当と認める者が受講している。

初級４コースは、ゼロからスタートするJ100、初級前期のJ200、初級中期のJ300、初級後期のJ400である。新規受講者はコース開始前のプレースメントテストを受けてクラスに配され、希望があればコーディネーターと話し合いの上、移動することもあり得る。コース修了者は、進級し、継続して受講することができる。各コースとも時間帯の異なる３クラスを並行して開講しているが、受講者には所属クラスに継続的に出席することが求められる。

J400を修了した学習者は、J500以上の技能別コースに進級する。

### 2.2　年間スケジュール

初級補講コースの授業は、１コマ75分で、１週間に５回、１学期に10週、合計50回からなる。年間スケジュールは、１学期が４月中旬から６月下旬、２学期が９月中旬から11月下旬、３学期が12月上旬から３月上旬までである。２学期は１年間の短期交換留学生が多く、最も人数が多い。大学院入試が２月初めと、夏から秋に（専攻によって異なる）行われるため、欠席者が増えることがある。

### 2．3　4コースの目標と教材など

初級コースの目標は、「日常的で具体的な話題についてコミュニケーションできること」である。J100とJ200ではさらに下位項目を設け、J300とJ400では先の目標と平行して、読み書きや口頭表現についての目標を挙げている。

コース開始前のオリエンテーションにおいて、コースの目標とともに、使用する教材、評価基準、宿題などを学生に示している。

教科書は『初級日本語』を用い、副教材として『SFJ』Notes、『わくわく文法リスニング（以下、わくわく）』のほか、『SFJ』に準拠した語彙練習のVocabulary Check（VC[3]）、New Words（NW）、文法の予習確認としてGrammar Check（GC）、文法の復習としてReview Sheet（RS）、作文Sentence Writing（SW）がある。J100の文字教材は『Writing System in Japanese（HIRAGANA Textbook）』『SFJの読み書き（Reading and Writing KATAKANA）』がある。J200は『わたしのにほんご』を、J400では音読教材「Daily Reading Aloud」（DRA）と読解会話作文教材「Read to Talk and Write」（RTW）を用いている（表２参照）。

### 2．4　受講生の特徴と問題

加納（2008）は、近年短期留学生の増加に伴って補講初級コースが拡充されたと述べている。最近の傾向として、短期留学生の増加のほか、研究生は日本語が未習でも入ってくるなどレベルが変化しており、大学院入試が近づくと日本語授業を欠席しがちになる問題も起きている。正規生は専門授業やゼミに出席するため、日本語授業と重なった場合は定期的に欠席することになり、学習に影響が出る場合もある。

これらのことから、学期途中で授業を放棄する学習者（以下、ドロップアウト）が問題となっている。コース開始から一定期間は、レベル変更の相談に応じ、また登録取り消し期間を設け、学習者がキャンセルを申し出ることで履修放棄という扱いにしている。しかし、その期間後も受講していたがドロップアウトする学習者がおり、当初は日本語学習を続ける意志があったにもかかわらず、何らかの理由によってドロップアウトしたと考えられる。2011-3と2012-1における各コースのドロップアウト率は表１の通りである。

**表１　2011-3と2012-1のドロップアウト率**

| | 2011-3 | | | 2012-1 | | | | 2011-3 | | | 2012-1 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 登録 | DO | DO率 | 登録 | DO | DO率 | | 登録 | DO | DO率 | 登録 | DO | DO率 |
| J100 | 26 | 12 | 46% | 34 | 5 | 15% | J300 | 26 | 11 | 42% | 30 | 7 | 23% |
| J200 | 37 | 4 | 11% | 24 | 9 | 38% | J400 | 44 | 14 | 32% | 27 | 7 | 26% |

注：登録＝登録者数、　DO＝ドロップアウト数、DO率＝ドロップアウト率

以上のような状況の中で、初級日本語補講コースではどのような授業を行い、改善をしているかについて、2011-3と2012-1を比較しながら述べる。

## 表２　2011-3における４コースの対象者、目標、教材、評価、宿題など

| コース | | J100 | J200 |
|---|---|---|---|
| 対象者 | | 日本語がわからない人や少しだけわかる人 | 日本語を150時間ぐらい勉強して、初級前半の日本語が終わった学生 |
| 目標 | | 日常的で具体的な話題についてコミュニケーションができること<br>（1）基本的な文法を理解して会話ができること<br>（2）ひらがなとカタカナが読めて書けること<br>（3）簡単な日本語の読み書きができること<br>（4）簡単なプレゼンテーションができること<br>（5）コミュニケーションに必要な文化的な知識を学ぶこと | 日常的で具体的な話題についてコミュニケーションができること<br>（1）基本的な文法を理解して会話ができること<br>（2）簡単な日本語の読み書きができること<br>（3）習った文法や語彙、話すスキルを使って簡単なプレゼンテーションができること<br>（4）コミュニケーションに必要な文化的な知識を学ぶこと |
| 教科書 | | 『初級日本語』Lesson 1- Lesson 6 | 『初級日本語』Lesson 7- Lesson 12 |
| 副教材 | | 『SFJ』Notes Vol.1<br>『わくわく文法リスニング』<br>オンラインで使える音声・映像教材<br>『Writing System in Japanese(HIRAGANA Textbook)』<br>『SFJ の読み書き(Reading and Writing KATAKANA)』 | 『SFJ』Notes Vol.1 & 2<br>『わくわく文法リスニング』<br>オンラインで使える音声・映像教材<br>『わたしのにほんご』 |
| 評価 | 出席条件 | 60%以上の出席が必要 | 60%以上の出席が必要 |
| | 中間テスト | 文法・聴解＋オーラル　30% | 文法・聴解＋オーラル　30% |
| | 期末テスト | 文法・聴解＋オーラル　40% | 文法・聴解＋オーラル　40% |
| | 発表 | プレゼンテーション　10% | プレゼンテーション　10% |
| | クイズ | クイズ　10% | クイズ　10% |
| | 授業態度 | 授業態度　10% | 授業態度　10% |
| 宿題 | | Vocabulary Check | Vocabulary Check |
| | | Grammar Check | Grammar Check |
| | | Review Sheet | Review Sheet |
| | | Sentence Writing | Sentence Writing |

| コース | | J300 | J400 |
|---|---|---|---|
| 対象者 | | 200時間ぐらい勉強して、初級前半の日本語が終わった学生 | 日本語を300時間ぐらい勉強して、初級前半の日本語が終わった学生 |
| 目標 | | （1）日常的で、具体的な話題についてコミュニケーションができる。<br>（2）簡単な日本語を読んだり書いたりすることができる。<br>（3）日本語で簡単なスピーチをすることができる。 | （1）日常的で、具体的な話題についてコミュニケーションができる。<br>（2）簡単な日本語を読んだり書いたりすることができる。<br>（3）簡単な日本語で意見を言ったり意見を交換したりすることができる。 |
| 教科書 | | 『初級日本語』Lesson 13 – Lesson 18 | 『初級日本語』Lesson 19- Lesson 24 |
| 副教材 | | 『SFJ』Notes Vol.2 & 3<br>『わくわく文法リスニング』<br>オンラインで使える音声・映像教材 | 『SFJ』Notes Vol.3<br>『わくわく文法リスニング』<br>オンラインで使える音声・映像教材<br>音読教材「Daily Reading Aloud」（DRA）<br>読解会話作文教材「Read to Talk and Write」（RTW） |
| 評価 | 出席条件 | 60%以上の出席が必要 | 60%以上の出席が必要 |
| | 中間テスト | 文法・聴解＋オーラル　30% | 35%（文法・聴解 20%　オーラル 15%） |
| | 期末テスト | 文法・聴解＋オーラル　40% | 35%（文法・聴解 20%　オーラル 15%） |
| | 発表 | プレゼンテーション　10% | |
| | クイズ | クイズ　10% | クイズ 10% |
| | 授業態度 | 授業態度　10% | 宿題や授業態度　10% |
| | その他 | | 音読 DRA　5%、読解会話作文 RTW　5% |
| 宿題 | | Grammar Check | New Words |
| | | Review Sheet | Review Sheet |
| | | 作文 | |
| | | わくわく文法リスニングディクテーション | |

### 表 3　J100　各課の構成（2011-3）

| | 宿題提出 | モデル会話 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | 会話ドリル | Oral Check |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | VC | MCチェック | SD1 | わ | | | |
| 2 | GC | | SD2 | わ | SDQ1 | | |
| 3 | | | SD3 | わ | SDQ2 | | |
| 4 | | | SD4 | わ | SDQ3 | | |
| 5 | RS | MC | | | SDQ4 | CD | |
| 6 | SW | | | | | CD | Oral Check 準備 |
| 7 | | | | | | | Oral Check |

### 表 4　J100　各課の構成（2012-1）

| | 宿題提出 | モデル会話 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | 会話ドリル | Oral Check |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | MCチェック | SD1 | | | | |
| 2 | VC | | SD2 | わ | | | |
| 3 | | | SD3 | わ | | | |
| 4 | GC | | SD4 | わ | | | |
| 5 | | | | | | CD | |
| 6 | RS | MC | | | SDQ | CD | Oral Check 準備 |
| 7 | | | | | | | Oral Check |

### 表 5　J200　各課の構成（2011-3）

| | 宿題提出 | 発音 | 新出語 | モデル会話 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | 会話ドリル | その他活動・教材 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | VC | P1 | C | MCチェック | SD1 | わ | | | |
| 2 | GC（答合わせ→提出） | P2 | C | | SD2 | わ | | | |
| 3 | | P3 | C | | SD3 | わ | | | |
| 4 | RS | P4 | C | MCチャレンジ, MC | | | | CD | |
| 5 | SW | | | | | | | CD, Roleplay | |
| 6 | | | | | | | SDQ | | 「わたしのにほんご」 |

### 表 6　J200　各課の構成（2012-1）

| | 宿題提出 | 発音 | 新出語 | モデル会話 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | 会話ドリル |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | VC | P1 | C | MCチェック | SD1 | わ | | |
| 2 | GC（答合わせ→提出） | P2 | C | | SD2 | わ | | |
| 3 | | P3 | C | | SD3 | わ | | |
| 4 | RS | P4 | C | MCチャレンジ, MC | | | | CD |
| 5 | SW | | | | | | | CD, Roleplay |
| 6 | | | | | | | SDQ | |

発音：発音練習　新出語：新出語カード練習

### 表 7　J300　各課の構成（2011-3）

| | 宿題提出 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | モデル会話 | 会話ドリル | タスク |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | GC | SD1 | | NWQ | | | |
| 2 | | SD2 | わ | SDQ1 | | | |
| 3 | | SD3 | わ | SDQ2 | | | |
| 4 | | | わ | SDQ3 | MC | ,CD | |
| 5 | | | | | | CD,Roleplay | |
| 6 | RS,SW,わディクテ | | | | | | Task |

### 表 8　J300　各課の構成（2012-1）

| | 宿題提出 | 新出語 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | モデル会話 | 会話ドリル | タスク |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | GC | WC | SD1 | | NWQ | | | |
| 2 | | WC | SD2 | わ | SDQ1 | | | |
| 3 | | WC | SD3 | わ | SDQ2 | | | |
| 4 | | WC | | わ | SDQ3 | MC | ,CD | |
| 5 | | WC | | | | | CD,Roleplay | |
| 6 | RS,SW,わディクテ | | | | | | | Task |

「わディクテ」は、『わくわく』を用いたディクテーション　「WC」はWord Card

### 表 9　J400　各課の構成（2011-3）

| | 宿題提出 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | モデル会話 | 会話ドリル | DRA(L19-L21) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | NW(答合わせ→提出) | SD1 | わ | | | | |
| 2 | | SD2 | わ | SDQ1 | | | DRA1 |
| 3 | | SD3 | わ | SDQ2 | | | DRA2 |
| 4 | | | | SDQ3 | MC | CD | DRA3 |
| 5 | RS(答合わせ→持ち帰り) | | | | | CD | |
| 6 | RS訂正提出 | | | | | Roleplay | |

### 表10　J400　各課の構成（2012-1）

| | Moodle予習 | 宿題提出 | 構造ドリル | わくわく | クイズ | モデル会話 | 会話ドリル | Oral Check | DRA |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | GC,VC,NW | NW(答合わせ→提出) | SD1 | わ | | MC | | Oral Check アナウンス | |
| 2 | | 前課のSW | SD2 | わ | SDQ1 | | | | DRA1 |
| 3 | | | SD3 | わ | SDQ2 | | | | DRA2 |
| 4 | | | | | SDQ3 | MC | CD | | DRA3 |
| 5 | RS | RS(答合わせ→持ち帰り) | | | | | CD | | |
| 6 | | RS訂正提出 | | | | | CD,Roleplay | | |
| 7 | | | | | | | | Oral Check, FB | |

L23からL24にかけて、RTWを 5 回実施

表中の記号（全表共通）VC : Vocabulary Check、GC : Grammar Check、RS : Review Sheet、SW : Sentence Writing、わくわく：『わくわく』、SDQ : 構造ドリルクイズ、MC : Model Conversation、NW : New Words、DRA : Daily Reading Aloud、RTW : Read to Talk and Write、FB : Feed Back

## 3．J100コース

### 3．1　J100コース概要

J100は主に日本語ゼロレベルの学習者を対象とし、1)基本的な文法を理解して会話ができること、2)ひらがなとカタカナ（以下、仮名）が読めて書けること、3)簡単な日本語の読み書きができ、簡単なプレゼンテーションができること、4)コミュニケーションに必要な文化的な知識を学ぶことを目標としたコースである。

表３から表10は、J100からJ400の2011-3と2012-1の各課の授業構成である。

### 3．2　2011-3授業報告（小浦方理恵）

主教材『初級日本語』のL1-L6、聴解教材『わくわく』のL1-L23を学習範囲として授業を進めた。授業ではモデル会話（MC）視聴の後、『初級日本語』の文法ドリルであるStructure Drills（SD）で文法を確認してから再度MCを視聴して課の学習項目を確認し、会話ドリルであるConversation Drills（CD）へと進む。そこに『わくわく』を組み合わせるという流れで進めた（全体スケジュールは表11を参照のこと）。また、評価についても、文法や口頭表現、文字、そして出席回数や宿題提出状況など、複数の観点から評価を行った（評価については表12を参照）。

表11　全体スケジュール

| 週 | 授業内容 |
|---|---|
| 1 | オリエンテーション<br>ひらがな、L1 |
| 2 | ひらがな、L1、L2 |
| 3 | L2、カタカナ |
| 4 | L3 |
| 5 | L3、中間試験 |
| 6 | L4 |
| 7 | L4、L5 |
| 8 | L5 |
| 9 | L6 |
| 10 | L6、期末試験、スピーチ |

OCはOral Check

表12　評価の流れ

| 課 | 文法 | 口頭表現 | 文字 | 宿題提出 | 出席回数 |
|---|---|---|---|---|---|
| | レベルチェック | | ひらがなクイズ | | |
| 1 | SDQ | OC | | VC, GC, RS, SW | |
| 2 | SDQ | OC | ひらがなテスト | VC, GC, RS, SW | |
| 3 | SDQ | OC | | VC, GC, RS, SW | |
| | 中間テスト<br>文法・聴解 | | カタカナテスト | | |
| 4 | SDQ | OC | | VC, GC, RS, SW | |
| 5 | SDQ | OC | | VC, GC, RS, SW | |
| 6 | SDQ | OC | | VC, GC, RS, SW | |
| 7 | 中間テスト<br>文法・聴解 | スピーチ | | | |

### 3．3　2011-3の成果と課題（段麗君）

2011-3の授業の成果と課題としては、次のことが挙げられる。

成果の１点目に挙げられるのはスケジュールについてである。１課を７回で終わるというスケジュールは時間的にゆとりがあり、更に『SFJ』のやり方を踏襲して、SDもCDも習ったものを同じ場面で何度も繰り返して練習を行ったことが非常に効果的であった。例えば、L1のSD8とCD1（自己紹介）、L3のSD1とCD1（人数）、L4のSD4とCD1（存在）、L6のSD10とCD6（書き方を聞く）である。

成果の2点目に挙げられるのは、口頭表現の応用力の向上である。各課のオーラルチェックの時間の前に必ず準備の時間を設けており、上述のスケジュールのゆとりにも関連しているが、この準備の時間には、ペアを固定せずに何度も繰り返して練習したのが応用力にもつながったと考えられる。

次に、課題について述べる。最大の課題は文字学習である。コースが始まった当初、仮名の読み書きができない学習者が多く、習得に時間がかかった。文字学習は『SFJ』のように、すべて平仮名とカタカナで書かれている教科書では学習の基礎になる。努力や練習をしない人は後も続かないのは言うまでもない。特にカタカナは最後までできない学習者がいた。そこで、文字学習のスケジュールの調整が早急の課題である。

課題の2点目は発音である。発音練習の時間は特に設けておらず、オーラルチェックの練習時にのみ行った。今後はまとまった時間をとって発音の練習をさせたい。また、授業中の学生の発話量を増やす工夫が必要である。

課題の3点目はSDクイズ（SDQ）についてである。基本的には復習として行い、クイズ中のディクテーションの問題はその場でフィードバックを行ったが、他の書かせる問題のフィードバックには無理があった。別にフィードバックの時間を設けたほうが良いだろう。また、課によってはSDQを複数回行う場合もあったが、スケジュール上の工夫はできないか検討が必要である。

### 3.4　2012-1授業報告（今井新悟）

日本語文字体系は複雑であり、日本語学習開始時の最初の関門となる。導入期における負担軽減のため、ローマ字を用いる方法も存在するが、J100では漢字仮名混じり文に適宜仮名を振った教科書を使うため、仮名が読めないと教科書が使えない。

過去の授業で最大の問題として指摘されたのは、教科書での授業が開始されているのに、仮名が読めない学習者がおり、予習・復習はおろか、授業中の練習にも支障があることであった。仮名は授業開始前のオリエンテーション時にワークシートを配布して、自習を促していたが、授業開始日までに仮名をマスターしている者は少数であった。そのため、授業開始から2週間は、教科書での授業と「並行」して、仮名を授業で導入していた。よって、仮名が読めない学習者が、漢字・仮名表記の教科書で学習するという矛盾を抱えていた。履修登録者のドロップアウト率が高い状況も続いていたが、その最大の原因が、この仮名が分らないことによる学習の困難が原因であると分析した。

この矛盾を解消するため、2012年度は最初の2週間に仮名の学習を集中して行い、その間は教科書での学習を行わないこととした。一方、全体の時間数は同じであるため、仮名以外の授業の期間が2週間分減ることになる。そこで、以下の対応策を講じた。1課にかける時間数を減らした。形成的評価としての確認クイズ（SDQ）の回数を減らして課ごと

に１回とした。学期末に設けていた復習、プレゼンテーション等をなくした。このように仮名学習にかける時間を増やしたため、教科書に沿った学習時間や応用的な活動は少なくせざるを得なかったが、結果は良好であった。ドロップアウト率は劇的に下がり、学習者同様教師も抱えていた矛盾・もどかしさが解消された。

2012年度の授業方法の変更のもう一点は、授業中の学習者の発話量を大幅に増やすため、教室での練習を原則として、ペアあるいはグループで行うこととして、教師による説明、例示を限界まで減らしたことである。その結果、学習者個々の発話量が大幅に増加したのに加え、良好なグループダイナミックも働くようになり、状況的学習論[4]（西口2002）の理念に近い学習環境が形成された。このような授業形態が実行できたのも、仮名の学習を徹底したことにより、学習者自らが教科書・文法解説等を読んで問題解決を図ることが可能になり、また、学習者間での教え合いが可能になったことによっている。ただし、この好結果が他の学期・学習者集団でも再現できるかは今後検証を重ねる必要がある。

次に、堀（2013）の学習者対象のアンケート調査結果について簡単に考察する。J100履修者の特徴は、学習の目的が日常の日本語にあるということである。履修理由として多いのは、「日本語に興味がある」「日常生活で日本語が必要」「日本人と話せるようになりたい」である。反対に、入試や専門のために日本語が必要という理由を挙げた者は少ない。日本語を将来どのようなことに使いたいかということについても日常的なことが多い。それに続いて、新聞を読む、授業を理解する、専門での発表・質疑応答が挙げられている。これらはJ100の修了時点での目標ではなく、あくまで将来的な希望であろう。

Can-do調査の結果、平均が4ポイント以上のものは、平仮名・片仮名の読み書きと自己紹介のみである。それに続く3ポイント台の項目はなく、上記以外は学習者自身ができると思えるものがないという結果である。例えば、レストランでの注文や分らない言葉をたずねる、といったことはまさしくJ100で学習したことであり、限定された表現でならできるはずであるが、自分が表現したいことを十分に満足できる程度には至っていない故の自己評価の結果であろう。

### 3．5　J100コースまとめと今後の課題（石上綾子）

2011-3の授業内容は、各課をMC（モデル会話視聴）→SD/わ→SDQ→MC→CD→オーラルチェックの流れで行った。仮名は、授業開始後『初級日本語』を使った授業を行いながら並行して導入した。2011-3の授業計画はスケジュールの組み方にゆとりがあり、SD、CDの練習を十分にすることができた。また、オーラルチェックの前に時間を設けることでペアを変えたり、繰り返し会話練習をすることができ口頭表現の応用力がついてきた。

2011年度を通しての最大の問題は、授業が始まった時点で学生が仮名の読み書きができないことであった。そのため授業に支障をきたしていた。そして、ドロップアウトをする

学生が多かったことが挙げられる。その理由は文字学習にあるのではないかという担当教師の分析をもとに話し合いを行った。そこで、2012-1に向けて新たな試みを行うことにした。この結果は前述のように良好で、文字を習得した上での学習は良い結果となり、2012-1のドロップアウト率は前年度と比較して大きく下がったのである。

このような実践から今後に向けての課題を以下に挙げたい。

１点目は、2012-1に行った、仮名の文字のみを学習する文字集中学習のスタイルは１学期限りの結果であることから、他の学期や学習者でも同様の結果となるか今後も検証する必要がある。

２点目は、この文字集中学習を行う際のテキストや副教材の整備が挙げられる。今までの、テキストと並行して文字学習をする教材とは違う、新たな文字集中学習に沿ったものを整備、作成していきたい。

３点目は、日本語学習をするのが初めての学生が、自己紹介や仮名の読み書き以外に、J100で学習した事項をもとに日常生活の中で、少しでもコミュニケーションできるようにしたい。

## ４．J200コース（小浦方理恵、酒井たか子、高原真理、段麗君、李在鎬）

J200は、初級学習者を対象とするJ100の継続コースであり、新規の受講者に加え、J100からの継続受講者が多いことが特徴である。コース全体としては、1)単文から複文への橋渡しを行い、全体的な運用力を高めること、2)学習した文法・語彙を使って、身近なストーリーが話せるようになることを目標にしている。

### ４．１　2011-3授業報告

#### ４．１．１　2011-3授業内容

教室活動では、一つの課に対しておおよそ６回に分け、複数の活動を組み合わせて授業を行った。教材は、『初級日本語』のほかに、文法練習用の教材として『わくわく』、話す練習用の教材として『わたしのにほんご』を使用した。

１課ごとの授業の構成については、表５、６の通りである。J200で特徴的なのは、「発音練習」と「Word Card」を使った練習をほぼ毎回の授業で実施した点である。「発音練習」とは表５、６の「P」のことで、『SFJ』Notesの「Report」[5]を使って新出文法項目や語彙を利用しつつ、発音矯正に焦点を当てた練習である。特に学習者に共通の弱点である促音や長音、イントネーションやアクセント等の練習を行った。「Word Card」とは表中の「C」のことで、新出単語が理解できているか確認するために行った絵カードを使った練習である。この練習は、回が重なるごとにタスクの難易度が上がるように調整しながら行った。そのほかJ200の特徴として挙げられるのは、前述の『わたしのにほんご』を取り入れたこ

とであり、これは話す力を向上させることを目的に行った。

次に評価についてであるが、J200では以下の表13の流れに沿って行った。

SDQは、その課で学んだ文型、表現が正確に定着しているかを確認するための小テストである。宿題チェックのVC、GC、RS、SWは、予習復習のために宿題として課した記入式のワークシート冊子のことである。また、前半のL7-L9終了後には中間テスト、後半のL10-L12終了後には期末テストを実施し、それぞれのテストでは文法、聴解、会話の試験を行った。そしてコースの最後に行う「期末発表」は、ポスター発表の形式をとり、J200で学んだ表現を使って１人５分の発表、および質疑応答の時間とした。トピックは「日本に来てびっくりしたこと」であり、これは『わたしのにほんご』で扱ったテーマから選んだものである。評価は、J200で学習した内容が使えたか、原稿を見ずに聞き手の目を見ながら話せたか、きれいな発音で流暢に話せたか、内容は面白かったか、他の学生の質問に上手に答えられたかといった観点から行った。

**表13　J200評価の流れ**

| 課 | 文法・聴解 | Oral | 宿題チェック |
|---|---|---|---|
| L7 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| L8 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| L9 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| | 中間文法・聴解テスト | 中間会話テスト | |
| L10 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| L11 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| L12 | SDQ | | VC, GC, RS, SW |
| | 期末文法・聴解テスト | 期末会話テスト<br>期末発表 | |

### 4.1.2　2011-3の成果と課題

以上の授業内容を踏まえ、2011-3の成果として次の３点が挙げられる。1)「Word Card」の活用、2)発音練習の充実化、3)期末テストの見直し、である。以下、順に述べる。

1)「Word Card」を使い、語彙の定着だけでなくそれを利用した発展的な練習まで行った。１日目は主に新出単語を覚えたかどうかの確認を行った後、２日目以降は、その語を広げて反対語や類義語、文作りなど、複雑なタスクを行うことで定着をはかった。2)「発音練習」では、『SFJ』Notesの「Report」を使い、発音のみに集中できるようにした。「Word Card」と同様に、４日間繰り返し練習をさせた。授業外でも練習できるように３種類の異なったスピードの音声を用意し、シャドーイングをさせた。また、学習者同士で発音の問題点を指摘するピア活動も見られた。こうした複数の要素を組み合わせ、教室活動もスムーズに進行できた。2)「発音練習」を期末テストにも読む課題として取り入れたことが、結果的には学習者の練習意欲の向上にも繋がった。3)期末テストを全面的に見直した。文法・聴解においては、J200が終了した時に何ができるかに焦点を当てて作題した。文法

では、単純な知識を問う問題ではなく、総合的な産出能力、コミュニケーション能力を問う問題を作成した。聴解では、既習の文法項目を含む会話を聞き、絵を使い、内容確認をする問題を作成した。そして、音声もナチュラルスピードのものを使用した。

さて、課題について2点を述べる。1点目に副教材の『わたしのにほんご』について、2点目に宿題について述べる。まず『わたしのにほんご』は『初級日本語』とは別に、より発展的な話す力の向上のために取り入れた教材であるが、モデル文の構成要素を入れ替えるだけの練習に留まってしまった。その理由として、教材のシラバスがメインテキストである『初級日本語』とは異なっていることが挙げられる。限られた時間の中で別シラバスの教材を取り入れることは難しく、効果的に活用することができなかった。2)宿題の問題として、十分なフィードバックが行われていない点やコミュニケーション能力の向上に必ずしもつながらない課題設定が多い点は、改善する必要がある。既習文法項目を駆使し、応用に重点を置いた課題設定が必要と考えられる。

### 4.2　2012-1授業内容

2012-1では、授業内容の基本的な枠組みは前年度を踏襲しつつ、前述の課題を踏まえ、部分的に改善を行った。主な変更点は以下の2点である。まず、『わたしのにほんご』を使った活動は時間的な面からやむなく見送ることとし、その分SDやCDの練習に使うことにした。そして、学生の運用力・発信力を高めることを目的に、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下SNS）を使った作文指導という新たな試みを行った[6]。

SNSを使った授業は、合計6回行った。第1回は、PCで日本語を入力する方法から日本語のタイピング練習を行った。そして、宿題として3つの作文課題を設定し、締切りまでに各自が入力するように指示した。作文のテーマは、①家族紹介、②つくばの好きなところ、③私の好きな日本語、であった。

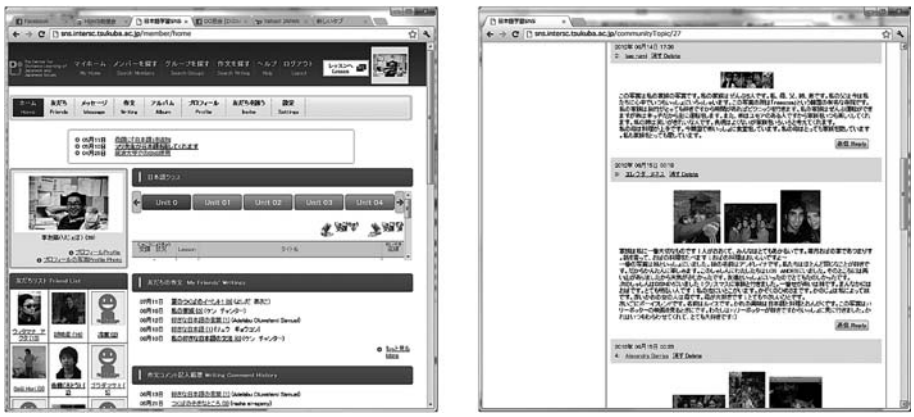

図1　日本語学習用SNS

図１の左はログイン後に表示されるマイページであり、右側は課題①の家族紹介の作文例である。SNSを通じて行ったタスクは評価の対象にはしておらず、日本語の学習意欲の向上を目的に自学自習の考え方で行った。

SNSは、文字だけでなく、写真や動画などのマルチメディアコンテンツも積極的に活用するよう促した。具体的には、課題①では、家族写真をアップロードし、説明するようにしたり、課題②では、好きな場所の写真なども載せるように指示した。クラスの作文は、担当教員はもちろん学習者同士も共有し、お互いに対してコメントし合うなどして、日本語を使った積極的なコミュニケーションを図った。

合計６回の授業を行ったが、前半の４回目までは、締切りまでに課題が提出され、フィードバックなども含めスムーズに進行できたが、後半の２回に関しては、締切りが過ぎても課題が提出されず、投稿意欲を促す仕掛けが必要であると考えられる。SNSの具体的な課題としては、次の２点が考えられる。１点目は、学習者と教師のやり取りが中心になり、学習者同士のやり取りは必ずしも期待通りにはならなかった点、２点目は、作文のテーマが授業で取り上げているレッスンと必ずしも繋がっていない点である。１点目の課題に対しては、外部協力者（メンター）を入れるなどの方法で活発な対話を促したいと考えている。また、２点目の課題に対しては、授業内容と継続性を持つような課題設定を検討したいと考えている。

### ４．３　J200コースまとめと今後の課題

J200は、日本語の基礎的な学習を経た学習者であることを前提にしているため、初級学習者といってもゼロからの日本語教育ではない。とはいうものの、タスク設定に関しては、やはり初級学習者に向けた内容の工夫が必要であるという難しさがある。また、J300コースに繋げられる日本語能力がついたかが、コース全体の成果評価において重要であると考えられる。これらの課題に対しては緊密な相互連携が求められる。

## ５．J300コース（近藤幸子、木戸光子）

J300は教科書『初級日本語』L13-L18、『わくわく』L47-L70を学習範囲としている。日本語力の基礎となる初級文法・語彙などの定着と運用力の向上を図るとともに、中級を見据えた言語活動も視野に入れている。

### ５．１　2011-3授業報告

#### ５．１．１　2011-3授業内容

予習・授業・復習で行う活動の明確化を心がけ、宿題を授業活動に組み込んだ。聴解力の向上を目指し『わくわく』、『SFJ』聞くタスクの強化を行った。J300では日常のコミュ

ニケーションに加えて、発表や討論、作文のように大学での勉学を日本語で行うための基礎的な日本語力の向上を目指している。そのような日本語力が評価できるように中間・期末発表を重視した。

授業活動は以下のように、⑴文法中心の練習、⑵会話中心の練習、⑶タスクによる総合練習、⑷教養ある大学生に相応しい日本語の基礎力につながるディスカッションと作文、発表を行った。

⑴　文法中心の練習

＜クイズ＞

- NWQ（新出語の確認、課の最初の授業）
- SDQ（前日学習した文法の確認、５分で実施、授業中に学生同士交換して答合わせしてフィードバック後、回収して成績転記）

＜ウォーミングアップ＞

- Word Card（カードで語彙チェック）
- 『わくわく』（文法中心の聴解練習、復習として使用）

＜『SFJ』練習＞

- SD：文法練習、できるだけSDを実際の場面で使う練習もする
- 宿題チェック：授業内でGC、RSなどを学生同士でチェック、20分ぐらいでできる範囲

⑵　会話中心の練習

- MC：MCのDVDを見ながらCDで勉強することを確認
- CD：会話練習、できるだけCDを実際の場面で使う練習もする
- Role play：CDの応用練習

⑶　タスクによる総合練習

- 『SFJ』のTasks & Activitiesにあるような練習、特に会話と聴解練習『SFJ』以外のTask教材の活用も可

⑷　教養ある大学生に相応しい日本語の基礎力につながるディスカッションと作文

- 毎回あるテーマについて資料を読んでグループで話し合い、作文を書く
- 発表直前の授業では中間・期末発表と関連づける

### 5.1.2　2011-3の成果と課題

学習者の様子と担当教師の所見から、成果として次の２点が挙げられる。

1)運用力向上、自律学習促進を目的とした活動：こうした活動の中心となるものとして、発表が挙げられる。発表は、中間発表と期末発表の２回行った。期末発表には、日本人にインタビューを行い、それに基づいた作文を覚えて発表するという活動を新たに組み入れ

た。インタビューと発表後に行う質疑応答に際し、日本人との会話や専門分野の研究会などでも使用できる、教養ある大学生に相応しい日本語表現を紹介した。学習者はこうした表現を使用しようと努めていた様子である。学習者は総じてインタビューと発表に意欲的に取り組んでいた。その中で、運用力が向上し、自律学習が促進されたと推測される。

2)総合練習の時間の設定：『SFJ』各課の学習が終わった後、総合練習を行うため、タスクの時間が１コマ設けられた。この時間は、『SFJ』のTasks & Activitiesの問題をする、SDを補足する、などの活動に充てられた。総合練習は、学習事項を定着させ、四技能を活用しつつ、運用力を伸ばす一助になったようである。

一方、学習者の様子と担当教師の所見から、３点の課題が挙げられる。

1)学習事項の定着と運用力の強化：て形や受身形などは、学習時には習得しているようでも、時間が経つとすぐには運用できないという様子が見られた。

2)読み書きをする機会の確保：2.3にあるように、初級コースでは口頭によるコミュニケーション能力を伸ばすことが授業活動の中心となっている。そのため、読み書きをする機会が少なく、学習者が読み書きを得意としていない様子が見られた。

3)初級コース全体の連続性：会話、作文、発音練習などの目的と活動内容に、J100からJ400までの連続性が見られなかった。

### 5.2　2012-1授業報告

#### 5.2.1　2012-1授業内容

2011-3と授業内容・活動はほぼ同じであるが、「ミニ自由会話」の導入、「読解作文」と中間・期末発表との連携の強化、作文の清書にSNS導入、という３点を新たに加えた。ミニ自由会話は授業冒頭でテーマを指示してペアで自由に会話するというもので、学習者が授業で口頭練習をするウォーミングアップとし、教科書以外の様々な話題について話し、聞く活動とした。読解作文と発表は、より教養ある大学生に相応しい日本語を意識して１、２週間に１回の割合で授業に組み込んだ。SNSはJ200と同じものを使用し、手書きの作文の清書をするとともに、授業外での学習者同士や学習者・教師間の日本語コミュニケーション促進の一助として行った。

#### 5.2.2　2012-1の成果と課題

学習者の様子と担当教師の所見から、成果として、次の３点が挙げられる。

1)思考の深化、運用力向上、自律学習促進を目的とした活動：こうした活動の中心となるものとして、発表が挙げられる。発表は、2011-3同様、中間発表と期末発表の２回行った。2012-1に新たに行ったのは、次の２点である。

①２回の発表において、発表のテーマに沿った文章を読むという活動を新たに組み入れ、

「読解→作文→発表」という流れで行った。発表の前に文章を読むことは、発表について考えを深めるきっかけになり、作文を書いて発表するまでの流れがスムーズになった。

②発表形式は、中間発表では2011-3同様パワーポイントを使用したが、期末発表には新たにポスター発表形式を採り入れた。これら2種類の発表形式は、専門分野での研究発表にも応用できる形式であるが、日本語の授業活動であるため、制限を課した。パワーポイントはスライドを3枚までで文を入れないという制限、ポスターには文を入れないという制限である。パワーポイントを使用した発表は、字を見ずに聞き手にわかりやすく説明し、質疑応答をする練習になった。一方ポスター発表では、発表者は繰り返し説明することにより、日本語を話す自信を持つようになった様子である。聞き手は、聞く練習や、教養ある大学生に相応しい質問の練習ができた。そして、発表者と聞き手は、質疑応答により、互いに考えを深めた。

これら2点を含めた発表という一連の活動は、思考を深化させ、運用力を高め、自律学習を促進したと推測される。

2)学習事項を運用する機会のルーティン化：ミニ自由会話を毎回の授業に組み入れた。学習事項の反復練習、運用力強化につながったといえる。

3)予習と復習を強化するための副教材の使用：各課の授業をNWQ・GC→Word Card→SD／『わくわく』→MC→CD→Taskという流れで行った（表8参照）。このうち、NWQとGCは予習のため、Word CardとTaskは復習のため、この順に配置された。予習を行っている学習者にはNWQ、GCが各課の導入として機能し、その後の学習がスムーズに進んだ様子である。また、Word Cardで新出語を復習する際、その語を含んだ短文も練習した。それにより、語形と意味だけでなく、使い方も身についた様子である。

一方、学習者の様子と堀（2013）の行った学期途中の学習者対象アンケートの結果、及び担当教師の所見から、課題として次の2点が挙げられる。

1)学習事項の定着の強化：授業において達成度の高い学習者でも、期末試験における文法知識産出の達成度はそれほど高くなかった。

2)予習を励行させるための方法：毎学期言われてきたことではあるが、予習を励行するように指示しているにもかかわらず、2012-1も予習が十分でない様子が見受けられた。予習が足りないために、授業がスムーズに進まない場合も見られた。2012-2には予習のための宿題を出すこととした。

### 5.3　J300コースまとめと今後の課題

以上述べたように、初級後半に差し掛かったJ300は、中級が見え始めた初級である。学習者は、それまでに学習した内容を統合して何ができるかを意識するようになっている。2.4の表2にあるように、J300の目標は「日常的で、具体的な話題についてコミュニケー

ションができる」ことに加え、「簡単な日本語を読んだり書いたりすることができる」こと、「日本語で簡単なスピーチをすることができる」こととなっている。これらの目標は、2011-3と2012-1において、『SFJ』を中心とした練習を基礎として、読解、作文、発表という活動を通して具体化され、一定の成果を収めたといえる。換言すると、J300の特徴は学習した内容を統合して運用する機会を提供し、教養ある大学生に相応しい日本語の基礎力を養成しつつ、中級へと導き始める段階にあるということであろう。

今後の課題として考えられることは、次の通りである。

まず、全体的に学習事項の定着を強化する必要がある。5.2.2で述べたように、上位の学習者でも、必ずしも的確に学習事項が定着していない様子が見られた。J300になると複雑な文法も増えてくるため、学習者が自分の理解できない点や運用できない点に気づくことがさらに重要になる。そのため、予習同様、復習の重要性を説いて復習を指示する、時間をおいて反復練習をする機会を設ける、読み書きの活動を活用する、などの必要性が示唆された。

次に、中級に進んだ際の学習に耐えられる四技能にわたった学習を徐々に行っていく必要がある。まとまりを持った文章を書いて話すといったことは、発表という活動においてある程度行っている。一方で、まとまりを持った文章を読む、音で聞く、といった活動が少ないようである。堀（2013）の行った学期途中の学習者対象アンケートのコース別回答数によると、「日本語の小説や新聞が読めるようになりたい」、「日本語で授業が聞けるようになりたい」と回答したJ300の学習者が、各々回答者の４分の３強、いた。こうした学習者のニーズにも対応し、その準備となる活動をしていく必要があるだろう。

他方、学習者のニーズは今後も多様化すると推測される。従来多かった研究生に加え、短期留学生等（2.4参照）が増加し、学習者の多様化が進んでいることが一因である。そのため、「学術的場面での言語活動を目標とする学習者がいる一方、日常生活での使用を目標とする学習者もいる」（堀2013；5.2）と考えられる。個々のニーズにどう対応するかは今後の課題である。

最後に、初級コース全体に目を向けると、『SFJ』の進め方や『SFJ』以外の活動内容について、折に触れ、コース全体で情報交換をしていく必要があろう。初級コースの全体像を明らかにすることにより、各コースにおいて、より上のレベルに向けたより効果的な『SFJ』の進め方や活動を考えていくことができると考えられる。

## ６．J400コース（小野寺志津、小浦方理恵、許明子、堀恵子）

J400は、表２に挙げた３つの目標を掲げている。その上で、初級総仕上げの段階にあたるため、1)新たな文法項目の習得とともに、J300までの既習文法と関連づけ、整理すること、2)初級文法項目を正確かつ適切に使えるようになること、を目指している。中級レ

ベルのJ500からは技能別コースに分かれるため、J400では中級への橋渡しの役割を常に意識し、運用力の向上を心掛けてきた。

## 6.1　2011-3授業報告

### 6.1.1　2011-3授業内容

J400の特色ある活動は、表2のJ400と表9に示すように、1)RTW、2)音読練習DRA、3)ピア活動、の3点である。

1)RTWとは、①課のテーマに関連する読解、②教室外での日本人へのインタビュー、③インタビュー結果をクラスで報告する、④話した内容を作文にまとめる、という一連の活動を行うもので、J500での技能別クラスに対応できる運用力の養成をねらった活動である。2010年度から2011年2学期までは「休日」「ことわざ」「専門」の3課を行っていたが、75分授業では他の本来の授業活動との両立が難しく、2011-3では「専門」のみを5回の授業で行った。

2)DRAは、発音上の問題の意識化と改善を目的として2009年度から取り入れた音読練習である（加納ほか　2010）。使用教材は、『SFJ』Notesの各課の「Report」を使用した音読スクリプト冊子と「Report」のモデル音声である。学生は、音読スクリプトを見ながら自宅で練習をする。授業では、モデル音声の後についての音読から、個人の音読へと進み、その後、学生同士で互いの音読を聞き、相手の発音について気づいたことをコメントしあうピア活動へと進む。学生の文字の認識能力が不十分であること、発音が不正確であること[7]を補うため、2011-3には第19課から第21課までの3課分のみを継続して行うこととした。

3)ピア活動は各コースが取り入れているが、J400では特にSDQ、NW、RSの授業内での採点と、DRAの発音に関してコメントをし合うことを重視している。これによって内省を促し、自律学習の第一歩とするねらいがある。

### 6.1.2　2011-3の成果と課題

学生の様子と学期終了後の教師インタビューから、成果として次の3点が挙げられる。1)SDQ、NW、RSの採点をピアで行うことで、自らの不十分な点、間違いやすい箇所を発見できるようになり、内省と自律学習を促すことができた。2)SDQを中間テスト、期末テスト直前にまとめて返却することで、効果的に復習ができた。3)DRA活動を通じ、発音への意識が高まった。母語の異なる学生からの指摘によって初めて、聞きとれない発音をしていたことに気づいた学生がいた。

課題は、規定の授業内容に加え、運用力を高めることを目的として種々の活動を盛り込んだが、活動の時間が十分に確保できなかったことである。そこで、1)RTWの扱い、2)

スケジュールの見直し、3)学習者の負担軽減、の検討が必要になった。

1)RTWの扱い：学習者が積極的に取り組む姿勢も見られ、学生同士の話し合いも活発であったが、１コマ75分の中で活動時間を十分に確保することは困難で、活動の意義を十分に発揮することができなかった。

2)スケジュールの見直し：2011年２学期までRTW全３課を行っていたが、2011-3では「専門」のみにした。しかしその他の活動は変わらなかったため、日によって授業内容の量にばらつきが生じた。

3)学習者の負担の軽減：運用力を高めることを目指して活動を増やしたが、学習者にとっては教科書の学習以外のインプット、アウトプットが増えることになり、負担が大きくなった。そこで、負担を軽減する必要が生じた。

以上のことから、コーディネーターが各活動を精査し、取捨選択することにした。

### 6.2　2012-1の授業報告

#### 6.2.1　授業内容

2011年度の成果と課題を踏まえ、大きく２点の改善を行った。

1)『SFJ』を十分に活用して、インプットの負担を増やさず、授業全体を関連づけ、運用力を高める工夫をした。具体的には、a)MCと関連づけて各課でオーラルチェックを行い、評価する、b)音読練習DRAを全６課に増やす、c)Sentence Writing（SW）を取り入れる、の３点を行った。2)Moodle[8]によるe-Learningを導入した。

以下、順に述べる。DRAについては、次項で取り上げる。

1)『SFJ』のMCと「Report」に関連づけて口頭表現、文章表現の運用力を高めることにした。『SFJ』のMCは各課の冒頭に配置され、課の場面でどのようなコミュニケーションの手続きが取られているか注意させる（『SFJ教師用指導書』：p5）。2011-3までは課の初めにSDを行っていたが（表９）、文法項目を学ぶ目的が学習者には見えにくくなっていた。そこで2012-1からは、初日にMCを見せ、オーラルチェックの課題を提示して、到達目標を明確に示し、文法項目の機能を意識してSDを行うことができるようにした[9]（表10）。

a)オーラルチェックの導入：オーラルチェックとは、各課の場面で目標とする機能を果たす適切な会話ができるかを評価するもので、当該課の文法、文型はもちろん、それ以外の文法、文型の適切な使用も評価し、運用力を測るものである。課題は各課のRole playをもとに作成される。2011-3までは中間テスト、期末テストの会話テストにおいて、習った３課のうちの１つの課題（Role playを基にした問題）を行うだけであったことと比べると、口頭産出力の養成と評価に、より比重を置く構成となった。

b)DRAを全６課に増やした：「Report」を繰り返し音読することで、発音だけでなく、文法、文型や語彙の定着にも繋がるのではないかと期待された。

c)SWを取り入れた：RTWの廃止により、まとまった文章を書く練習がなくなる。そこで、SWを取り入れた。内容はレポート文に連動した作文とし、同じテーマ、構成で書かせた。そこで当該課の文法、語彙、表現を文章表現の形でもう一度使用することになり、さらに運用力を高めることをねらった。

以上、a)からc)の活動によって『SFJ』を十分に活用し、インプットの負担を増やさず、口頭表現と文章表現の運用力を高めることを目指した。

教材との関連づけた1課の流れは、下記のようになった。

MC視聴→オーラルチェックアナウンス→SD/わくわく→DRA→MC視聴→CD、Role play→オーラルチェック→SW

（下線はMCと関連した活動、□は「Report」を利用した活動である）

2)MoodleによるE-Learningの導入：自律学習を促すためMoodleによるE-Learningを導入し、NWQ、文法クイズをweb上で行えるようにした。

次ページ表14は、2012-1の授業活動のうち、評価に関わる項目を示す。紙媒体による文法・聴解テストだけでなく、産出力を評価する項目が増え、より一層学習者の全体的な日本語能力を測る方向へと進んだと言える。

表14　2012-1授業活動のうち、評価に関わる項目

| 課 | 文法・聴解 | Oral | DRA | 宿題チェック |
|---|---|---|---|---|
| L19 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| L20 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| L21 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| | 中間テスト(文法・聴解) | 中間会話テスト | 音読テスト | |
| L22 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| L23 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| L24 | SDQ | オーラルチェック | DRA | NW、RS、SW |
| | 期末テスト(文法・聴解) | 期末会話テスト | | |
| | | プレゼンテーション | | |

### 6.2.2　2012-1におけるDRAの取り組み

2012-1では全課でDRAを行うことになり、継続的に音読練習を行えるようになった。しかし、2011年度ではDRAでのピア活動に注目し、「相手の音読のどこに注目し、日本語でどうコメントするか」の練習を授業の1コマを使って行っていたが、2012-1ではその時間がなくなった。そのため、2012-1のDRAの目標を「学生が自分自身の問題点を把握し、

改善すること」と設定し直し、教師によるフィードバックの機会を前学期より増やすことにした。教材冊子には、自分の問題点を①把握し、②改善し、③教師やクラスメイトと共有する、という一連の活動を全課にわたって記録する「わたしのカルテ」という一覧表を追加した。また、評価は課ごとに、活動への参加度と問題点の把握と改善の度合いによって行った。

DRAによって、学生の発音に関する意識が変化するのか、変化するとしたら、どのように変化するのかを調べるため、DRAの事前と中間、そして事後の3回にわたって、アンケート調査を行った。その結果、「自分の発音のいいところを知っている」、「自分の発音の問題点を知っている」という項目の得点が上がっており、この活動によって自分の発音の良いところや問題点をよりはっきり把握できるようになったことが窺えた。また、自由記述には「発音がよくなったと思う」、「自分の問題点がよくわかった」という回答があり、目的は概ね達成されたと考えられる。

しかし問題点は、1)活動内容や評価基準、評価方法が確立せず、教師間で明確に共有できなかったこと、2)2011-3で行っていたピア活動の時間がなく、活動の広がりが見られなかったことである。この2点は今後の課題としたい。

### 6.2.3　2012-1の成果と課題

2011-3の課題は、次の→の後に示す対策を行って、解消した。

1)RTWの扱い→取りやめ、その代りオーラルチェック、SWを実施した

2)スケジュールの見直し→日によるばらつきがなくなった

3)学習者の負担→『SFJ』の教材をフルに活用することで負担を軽減した

最大の成果は、全ての活動をMCと「Report」に関連づけたことで課の目標が明確になり、コース全体が一貫性のある授業になったことである。また、当該課で習う文法、文型を繰り返し学習でき、定着を図ることもできた。

さらに、授業前にe-LearningによってNW、文法をチェックすることで一層の自律学習を図った。ただし、学生によって利用頻度にばらつきが見られた。

一方、2012-1の課題としては、1)会話、作文など産出力を発揮する場面で力不足の学習者が見られたこと、2)まとまった内容を聞く活動の不足、3)e-Learningのさらなる利用、が挙げられる。

1)産出力の不足：オーラルチェックでは教科書通りの文を使って準備したスクリプトを読み上げるだけの場合や、SWでは「Report」の名詞や動詞を一部入れ替えるだけの文が一部に見られた。習った文法、文型、語彙を使って新たな場面に応用する力をつけさせることが課題として挙げられる。

2)まとまった内容を聞く活動の不足：現行では、文法の聞き取り練習のための『わくわく』、

MCとDRAのモデル音声を聞く活動のみである。まとまった談話を聞き、課題解決のために情報を取るような聴解練習ができなかった。
3) e-Learningの一層の利用：繰り返し利用している学習者もいるが、利用頻度にばらつきがみられた。教師が利用を促すなど働きかけが必要である。

### 6．3　J400コースまとめと今後の課題

J400コースの目標達成のため、2012-1では『SFJ』を十分に活用して、口頭産出能力、文章表現力を高め、発音に対する内省を促すようにした。

表14の評価項目をこなして合格した学習者は、J400の目標を達成していると言える。しかしながら、6.2.3で指摘したように新たな場面への応用力をつける必要のある学習者も見られる。そのためには、まとまった内容のものを話したり聞いたり、書いたりする応用的な活動が必要であろう。e-Learningをさらに促進し、構造面の練習をより多く自律学習に委ねることができれば、応用練習に振り分ける時間が増やせる。初級の総仕上げとして、運用力を向上させるための活動をより一層充実させていくことが、今後の課題である。

## 7．まとめ

以上、初級補講コースのJ100からJ400は、共通目標である「日常的で具体的な話題についてコミュニケーションできること」を目指してそれぞれのコースで授業活動に工夫を凝らし、学期ごとに見直しと改良を図っている。

しかしながら、それぞれのコースには、3.から6.に示したように課題もまだ残されている。さらには、全体を通して見ると、『SFJ』に沿ったSD、CD、Role playは一貫して行われているものの、その他の会話、作文、発音練習、読解、発表などの活動は各コースで独自に行われており、必ずしも連続性が見られない。統一的な視点に立ったうえで、個々の活動が最大限の効果をもたらすように初級補講コース全体の設計をしていく必要があるだろう。

2013年度の2学期制への移行にあたって、今回明らかになった成果と課題を生かすことが必要である。

### 注

1．課の構成は『SFJ』と同じく全24課からなる。
2．英語コースの学類留学生である。
3．以下では、（　）の略語を用いる。
4．知識は、それが使われる状況により、価値が異なり、学習過程も異なる。本稿では、教室をそのリアルな状況と捉え、その構成員である学習者が協同して学習を進めると

いう意味で使っている。よって学習項目は教師から学習者に知識として伝達されるものではなく、学習者自らが分析・構造化するものとみなす。

5．「Report」は、モデル会話（MC）と関連した文章である。

6．SNSは、筑波大学留学生センターによる「日本語・日本事情遠隔教育拠点」事業の成果物である。「日本語・日本事情遠隔教育拠点」では、SNSの他、eラーニング日本語教材も開発しており、そのすべてのシステムは平成26年度に一般公開される予定である。「日本語・日本事情遠隔教育拠点」の詳細はhttp://www.intersc.tsukuba.ac.jp/~kyoten/を参照してほしい。

7．各学期終了時に補講コース担当者が一堂に会して反省会を行い、授業報告、改善点などに関する意見交換を行っている。そこで、J400を終了した時点で口頭表現能力が不足していること、文字の認識能力が不十分であること、発音が不正確であることなどの指摘があった。

8．Moodleとは、オープンソース・ソフトウェアを利用した授業支援システムのことである。筑波大学では従来のWebCTを利用したeラーニングシステムを廃止し、平成22年８月からMoodleを利用した新しいeラーニング学習管理システムを導入している。

9．ただし、文法項目の中には、当該課の会話で使われないものも含まれ、それらの定着については今後の課題である。

**参考文献**

加納千恵子（2008）「2007年度日本語補講コースの改編報告：カリキュラムの改編と技能別シラバスの整備」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』23号：135-146

加納千恵子・小林真紀子・関裕子・柳田直美・石上綾子（2010）「初級後期日本語授業の目標と課題-2009年度「J400」コースの実践報告-」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25号：67-86

小林典子・フォード丹羽順子・高橋純子・梅田泉・三宅和子（1995）『わくわく文法リスニング』凡人社

杉浦千里・小野寺志津・ボイクマン総子（2011）『わたしのにほんご』くろしお出版

筑波ランゲージグループ（1992）『Situational Functional Japanese』凡人社

筑波ランゲージグループ（1992）『Situational Functional Japanese 教師用指導書』凡人社

西口光一（2002）「日本語教師のための状況的学習論入門」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社：31-48

堀恵子（2013）「初級日本語補講コース学習者の学習目標と自己評価―受講生に対する学期途中のアンケート調査から―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28号：65-84